〈研究短報〉

事例演習に模擬患者（SP）として参加する地域住民の経験

庄村雅子*1・小島善和*1・茂木陽子*1・大山　太*1・佐藤幹代*1

Ⅰ．はじめに

日本の看護教育における模擬患者（以下SP: Simulated Patient）参加型学習は1990年代に始まり約20年が経過するが、コミュニケーションや対人関係の基礎教育と研究にとどまり、成人看護学などの領域別の教育にはまだあまり活用されていない実情にある。我々は、成人看護学において2002年から実習で接する対象に近い社会・文化的背景をもつ地域住民の方々にSPとしての協力を募り、全人的に相手を理解し、実際にケアを提供するまでの看護過程を展開するSP参加型事例演習を通し学生にとっては教育成果を挙げてきた[1]。しかし、SPを演じる地域住民の観点からはSP参加型演習の意義がこれまで検討されてこなかった。

そこで、成人看護学におけるSP参加型事例演習を経験した地域住民の方々がどのようなことを得たり、感じたりしているのか明らかにし、地域住民と共にSP参加型演習を発展させていくために必要な教員の役割や調整を検討したのでここに報告する。

Ⅱ．対象と方法

対象は、SP参加型事例演習にてSPを経験した地域住民で研究参加に承諾の得られた方とした。2009年8月に12名の対象に、研究者以外の面接者1名がインタビューガイドを用いたフォーカスグループインタビュー（以下FGI）を行った。SPとして感じたこと、得たことなどを自由に語ってもらい、許可を得て録音し、逐語録に書き起こし、Berelson. Bの内容分析を参考に質的帰納的に分析した。所属機関の倫理審査委員会で承認を受けたのち調査を開始し、口頭と文書で対象の承諾を得るとともに、研究過程を通してプライバシーを厳守した。

Ⅳ．結　果

12名の対象は、全て60～70歳台で、看護学科のSP以外にも医学部のSPや病院ボランティアを担う者が含まれた。事例演習にSPとして参加する地域住民の経験は、288の記述単位から148コード、49サブカテゴリー、13カテゴリー、最終的に4分類にまとめられた（表1）。

Ⅴ．考　察

事例演習にSPとして参加する地域住民の経験には、緊張や患者役を覚える大変さなどSPとしての困惑は少なからずあった。一方、自分達が世話になる看護師の教育に貢献する誇らしさや学生の真剣さ親身な学習態度に励まされ活力を得るなど自分自身の励みや成長が数多く挙がったことは、地域住民にSPとして事例演習に参加してもらう意義であり、継続の理由になっていると思われた。SPから挙げられた看護学生への願いやSP教育改善のための取り組みを教員が後押しし、地域住民と共によりよい実践的な看護教育を築くことができるようシナリオの洗練や演じる上でのポイントの強調など教員側の改善点が示唆されたことは今後の演習に生かしていけると考える。

文　献

1）高橋奈津子ら(2008)：模擬患者（SP）を活用した成人看護学慢性期事例演習での学生の学び、東海大学健康科学部紀要、第14号、pp.47-54.

＊1　東海大学健康科学部看護学科

表 1　事例演習に SP として参加する地域住民の経験

カテゴリー（13）	分類
・SP どうし互いの経験に学び支えを得る ・患者としての知識の獲得と自分の態度への反省 ・看護師の教育に貢献する誇らしさ ・励まされ活力を得る ・学生の成長の手ごたえ	1．自分自身の励みや成長
・SP としての緊張と負担感 ・学生の反応のもの足りなさ	2．SP としての困惑
・学生へのフィードバックでの迷いと工夫 ・SP としてリアルに患者を演じる模索 ・教員・教育側への疑問と改善の要求	3．SP 教育の改善のための取り組み
・医療の知識だけでなく人としての魅力や優しさもつよう願う ・懸命に学ぶ看護学生にエールを送りたい ・強く優しい看護師としての将来への期待	4．看護学生への願い